

Pianelle というはきものとイタリア宮廷舞踊

岡田 はるみ (比較舞踊学会)

Pianelle — A kind of footwear and the court dance in Italy

Harumi OKADA (Japanese society for comparative study of dance)

Abstract

1. In Italy, there was a kind of footwear which called pianelle, mainly in 14-17c. In this study, the footwear is examined on the viewpoint concerning the court dance in Italy.
2. The origin of pianelle seems to be a mixture of wooden footwear of the Near East and the European medieval wooden clogs, which avoid mud when walking outside.
3. According to the documents, there were many legislations about the height, materials and decorations of pianelle. Pianelle have been accused by clergymen as a symbol of vanity and waste.
4. Sumptuous pianelle seem to be an example of conspicuous consumption (Veblen) as well as an appeal of status through impracticality (Simmelhack).
5. In some cases ladies may have worn pianelle on the occasions of court dance for the purpose of dressing formally. The contents and illustrations in the manner book, "Nobilit  di Dame" by Fabritio Caroso suggests that they wore them on the court dance.
6. On the hypothesis that ladies wore pianelle on the court dance, several types of pianelle are examined on the point of easiness of moving. As a result, deep slipper type with wedge shape sole seems most available.

キーワード : pianelle, イタリア宮廷舞踊, 礼儀作法書, Fablitio Caroso

1. 研究目的

はきものの形状と機能は舞踊の技法にも大きくかわる。イタリアでは主に14世紀から17世紀に pianelle というはきものが広くはかれていたが、宮廷舞踊の場面においてもちいられていたかいなか、またその際どのような形状のものがもちいられていたかについては従来明らかではなかった。本稿ではその点を明らかにするため当時の記録、美術、礼書等にもとづき、仮説もまじえて考察を行なう。

先行研究としては国内では西洋のはきもの全般について市田⁹⁾、ルネサンス宮廷舞踊については川崎他¹⁰⁾の研究があるが、それらとともにイタリアの pianelle を詳細に論じたものとして Riello & Mcneil 編 "Shoes— from sandals to sneakers" (2006)²¹⁾ 中の Muzzarelli と Vianello の論文を訳出し参考にした^{19) 26)}。



図1 革製pianelle 1550-1575年頃
バルディーニ美術館、フィレンツェ⁵⁾

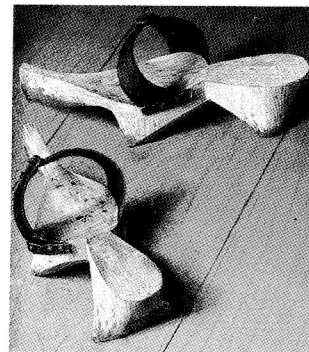


図2 Van Eyck, Y.「アルノルフィニ夫妻像」
(1434) 中の木製サンダル²³⁾

2. pianelleの起源と沿革

pianelleは現代のはきものでいえば日本語でいう「スリッパ」に似たはきものである(図1)、かかと部分が覆われていない点で靴と区別され、後述するように厚底のものもある。西洋におけるはきものの発達史上ハイヒールが現代のような形であらわれたのは17世紀半ば以降であり(市田1996:23-24)、pianelleはヒール部分が独立していないものの西洋の「高さのあるはきもの」としてはハイヒールの前触れといえよう。もっともギリシア時代にギリシア悲劇の俳優が身体を大きく見せるために厚底靴をはいた例があるので、歴史上最初の例とはいえない⁸⁾。後述する木のサンダルとの違いは、pianelleの場合底部が革や布等の素材でおおわれている点である。製法は底の薄いものは同時代の靴と同じく甲を裏返して底に縫い付けるターン製法、また厚底のものは甲と底の被覆材が直接縫い合わされた後木やコルクの底が挿入されさらに外底がつけられた¹⁾。英語 chopines は女性用の厚底のものをさすが、本稿では薄底のものも含め14-17世紀イタリアで男女にはかれたかかと部分に支持がなく底部が布や革でおおわれたスリッパ状のはきものの総称を pianelle として考察の対象とする。

2-1. 起源

pianelleの起源については①中世からあった泥よけの木製サンダル(Muzzarelli, C., 2006:63, Vianello, A., 2006:79, 図2)、②トルコ、シリア等中近東ではかかれていたkab-kabという下駄に似た一鼻緒はないが一木製サンダルの影響が いわれる(Muzzarelli, C., 2006:52, 63)²⁾。①は木の底に革のベルトをとりつけたもの。木靴はオランダのサボのようなくぬき型の木靴をもさすので本稿ではサンダルの語をもちいる。②は浴場用の簡素なものは①と同様であるが婚礼用や権力者用のものは底も高く、金属や貝、真珠母による象嵌等の装飾があった。起源についてMuzzarelliとVianelloの説はややこととなっているが、筆者はもともとイタリアに存在した①に交易の活発化とともにもたらされた②が加味されて成立したとかんがえる。Muzzarelliは形状の面から②をpianelleのうち底に二つの支えを持つ「橋型」pianelleと関係づけているが、①のなかにも下駄型ないし橋型のものが見られることから、筆者は②は形だけでなく装飾性、儀礼性の点でもpianelleに影響を与えたと考える(Muzzarelli, C., 2006:57-58)³⁾。つまりこの二つのはきものはpianelleに二つの要素、つまり実用性と装飾性一ひいては儀式、権威とのかかわりを伝えたとみられる。

pianelleの素材は木またはコルク製の底を革や布でおおい、多くは同素材の甲がつけられた。女性用には底の高いものもあり、革に細かい切れ込みが入れられたり、毛織物、絹、ビロードの地に刺繍、レースや金銀糸、貴石等で飾られたものがあり、16世紀末から17世紀のヴェネツィアでは高さ50cmに及ぶものもあらわれた(図1)。

2-2. 遺品資料 と埋葬例

pianelleの 現存する遺品はカナダ、トロントのバータ靴博物館、ボストン美術館、イタリアのヴィジェーヴァノ靴博物館、コッレール美術館等に収蔵されている（Vianello, A., 2006 : 63, Muzzarelli, C., 2006 : 84）。調査した範囲では現存する遺品の大半は厚底のものである。底まで布や革製のスリッパ状のものは少ない^{注4)}。

次に16世紀の遺品の記録として、Medici家の墓所が1857年に調査された時のスケッチ画によるとトスカナ大公妃 Maria Jovanna d'Austria (1547-1578) が厚底スリッパをはいた姿で埋葬され、その夫である Francesco 一世 (1541-1587) の棺の内部にもスリッパ状の pianelle とみられるものがあつた¹²⁾ (図3)。調査当時の記述によれば妃の「スリッパは金の飾り紐のついたピロード製で、そのきわめて高い靴底は、風変わりな形にカットされている。婦人靴は白い革製」ということから靴の上に厚底スリッパをはいていたことがわかる (Lippi, D. 他 2006 : 95)。原語は未確認であるがこのはきものは高価な素材がもちいられており pianelle と思われる。これらの遺品は現在では失われているが、この「厚底スリッパ」もその素材や着装のしかたからみてたんなる実用品ではなく正装の一部であつたことが推察される。

時代が前後するが Medici 家の Cosimo 一世の妃 Eleonora di Toledo (1522-1562) はほとんどがピロード製の53足の pianelle をもっていたが、靴はほとんどなく、他に冬用の革製 pianelle と毛皮裏付き半長靴をもっていた (Muzzarelli, C. 2006 : 62, 64)。また Eleonora は遺骨の X 線検査から乗馬の習慣があつたことが推測され、骨についた筋肉痕の状態から活動的な生活を送っていたことがわかつた (Lippi, D., 他 2006 : 129)。当時の貴婦人の乗馬は「片乗り」であるが上述の記録から Eleonora は pianelle をはいて乗馬していた場合も考えられる。16世紀前半の有名な作法書である Castiglione の『宮廷人』(1528) 中には青年たちが pianelle の一種 pell nelle (革製ミュールに似たものか) をはいて街を馬で乗り回すのを批判的に見た記述がある⁴⁾。

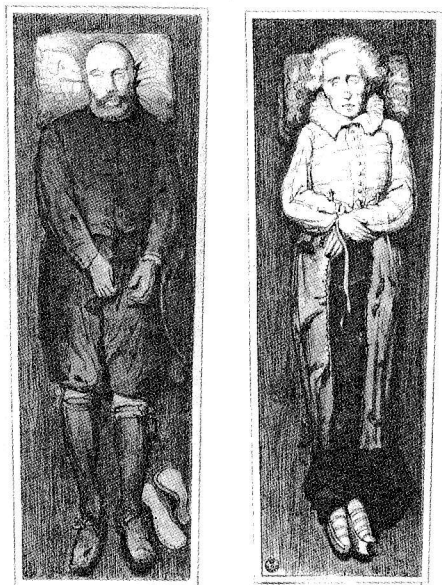


図3 Francesco 一世と Jovanna d'Austria の遺体スケッチ (1857)
ウフィツィ美術館写真資料室蔵 (Lippi, D. 他 2006 : 100)

2-3. 法的規制と聖職者からの批判

法制史の面からも pianelle の流行はあきらかにしめされている (Muzzarelli, C. 2006 : 57-62, 65-67)。文献に pianelle の語が初出するのは1384年であるが (Vianello, A., 2006 : 81)、15 - 17世紀のイタリア各地の公文書には奢侈禁止令の一環として pianelle の素材や装飾、底の高さを規制する法令の記述が多く見られ、身分による規制ももうけられていた。14世紀には「pianelle」という名称は特定されていないが「厚底のはきもの」の流行により「靴屋は女性の靴を脱がせて採寸すべし」という法令があつた²⁰⁾。Muzzarelli によると社会的地位の下になるほど規制がきびしくなったが地域差は存在し、高さ22cm以上を禁止するヴェネツィアの規制は実際には守られなかった。また権力者は法的規制を受けなかった。

高い pianelle は道徳的な面から聖職者の批判もあびた。15世紀には説教者 Giovanni da Capestrano、フランシスコ会士 Bernardino da Feltre がそれぞれ底の高い pianelle を罪深い浪費や虚栄のあらわれとして批判した (Muzzarelli, C., : 65-66, Vianello, A., 2006 : 81)。

14世紀にはつま先の長い靴である pouline のつま先の長さが競われたが、服飾史をつうじてくりかえし

あらわれる「非実用性による地位の誇示」²²⁾という原則はここでもあらわれている。現代のハイヒールにも通じるが、長いつま先の *poulaine* や底の高い *pianelle* をはくものは肉体労働に従事していないことをしめしている。社会学者 Veblen は『有閑階級の理論』で「見栄」による消費のあり方を *conspicuous consumption* (衒示的消費) と名付けたが、*pianelle* はこの「これ見よがしの消費」の例でもあるだろう²⁴⁾。

2-4. 着用の仕方

pianelle はその起源からして一種の上靴である。着用の仕方としては①靴下の上にはいている場合。②「底つきタイツ」*calze solate*⁶⁾の上。③Medici家の例のように靴の上にはいている場合。④はだしの上に直接着用²⁵⁾の各場合がある。このうち②の「底つきタイツ」*calze solate* は、13世紀からあらわれ靴に準じたものであり、*calze solate* 単独で着用される場合もあった。

14－17世紀のはきものの種類としては *pianelle* と木製サンダル、*calze solate* の他にブーツや平底の革靴、布靴等があり、その中でも *pianelle* はその形状から言って着脱しやすい利点はあるものの足の支持の点では靴やブーツにおとる。*pianelle* は泥除けにひとつの起源を持つものであったが、その相反する二つの側面である実用性と装飾性—儀礼性は着用者の身分、性、また着用場面、地方によりことになったあらわれ方をするようにみられる。

3. 絵画と *pianelle*

遺品資料や公文書に残された *pianelle* の記録についてみてきたが、絵画についてはどうか。以下二つの点について検討する。

3-1. 15世紀の絵画中の *pianelle*

15世紀を中心とするルネサンス期の巨匠による絵画を筆者が調査した範囲内では意外なことに *pianelle* が描かれていることは少ない。筆者の確認した例では以下の男性1例、女性4例である。①Carpaccio「聖女ウルスラ伝説」中「使節たちのイングランドの宮廷への帰国(1490-1496) 前景屋外の男性」¹⁾、②Philippo Lippi「ピッティのトンド」(1452) 侍女のはきもの¹³⁾、③Carpaccio「二人の婦人」(1490)²⁾、④Carpaccio「宮詣で」(1500-1506) 屋外の婦人2人のはきもの³⁾、このうち①②④はスリッパ状、③は厚底サンダル状のはきものである。

絵画に見える例が少ない理由は何か。ひとつには当時の絵画において、神や聖人をのぞいた俗人女性の足はほとんどの場合衣服に隠れて見えず、つま先がみえている場合もそれが靴なのか *pianelle* なのか、または当時男性によくもちいられ、女性にもはかれていた底つきタイツなのか判断がむずかしいという点がある。男性例の少なさについては、当時フィレンツェでは男性が *pianelle* をはくことは「女性的である」と考えられ着用者に罰金が課せられていたという指摘がある (Vianello, A., 2006, : 92)。

3-2. Vecellio "Degli habiti antichi et moderne di diverse parti del mondo" (Venezia 1590)

16世紀末、Tiziano Vecellioの一族である Cezare Vecellio (1520-1601) によってヴェネツィアで出版されたこの本には *pianelle* をはいた男女の記述および画像がある。この本は世界各国の服装を描いた版画集であり、それぞれの版画に説明がつけられた。1585年にイタリア各地を訪れた天正少年使節らしい「日本人の青年」の画像もみられる) 彼らはピサで舞踏会に出席した²⁷⁾。

当時のヴェネツィアは国内外の交易の中心地であり、この書はイタリア各地の当時の服装に限定すると、

16世紀後半の服装を知る上では信頼のおける資料といえる。画かないし説明からわかるイタリア人の pianelle 着用の22例（男性9、女性13）を階層別に1：貴族、2：高官（夫人）、3：富裕な市民、4：一般市民、5：農民、職人、6：娼婦のように分類すると、男性9例中1-2、2-4、3-1、4-1、兵士（儀仗兵）1、女性は13例中1-3、2-2、3-2、4-2、5-2、6-2であった。ただし女性の場合、文中に説明がなくてもスカート部分の長さから pianelle が服に隠れている可能性のある場合が他に9例あり、その内訳は1-6、2-1、4-1、5-1。イタリア以外ではフランス男性2（1-1、3-1）、バイエルン女性1（1）がある。イタリア人の着装例について補足すると①男性の場合、学生、農民、肉体労働者は革靴着用、ただし儀仗兵はビロードの靴か pianelle 着用（Vecello, C. 92-93）。②靴と pianelle の重ねばきの記述2例（男性フィレンツェ貴族とヴェネツィア近郊農婦）、裸足の上の着用1例—商人男性夏の場合。③娼婦2例は高さ15cmの pianelle をはいた街娼と富裕市民女性とまざらわしい高級娼婦である。④男性の pianelle はスリッパ状、女性の pianelle の底の厚さは指一本分ほどの農婦のものからさきの街娼のものまでさまざまであるが貴族女性には控えめな高さのものが好まれていた（Vecellio, C. 2004：114-115）。⑤画像中の pianelle はかかと部分がおおわれていない。ただしジェノヴァの女性2例はかかと部分が細いベルトで固定されている（Vecellio, C. 2004, 138-139, 172-173）。⑥女性の厚底の pianelle のなかには現代のウェッジソールのように底がくさび型に近いものがある（Vecellio, C. 2004：100-101, 142-143）。⑦女性の画像で足先だけでなく pianelle 全体が見えている例は1-1、3-1、4-1、5-2、6-2の7例。⑧ヴェネツィア近郊の農村では婚礼時に pianelle を姑が新郎新婦に送る習慣があった（Vecellio, C. 2004：165）。⑨pianelle 着用者中ヴェネツィア人は近郊を含め9例（男5、女4）。

上記のうちドージェ直属の儀仗兵の pianelle 着用は儀礼的な任務であるからか。当時ヴェネツィア共和国の最高権力者であるドージェが赤色のビロード製 pianelle をはいており、権威とのかかわりの意味が付与されていたことがうかがわれる。また⑧も pianelle の儀礼的役割を示唆する。農民男性は pianelle をはかないところから、婚礼での pianelle の贈答は「将来の富裕な生活」を象徴する儀礼であった可能性もある。

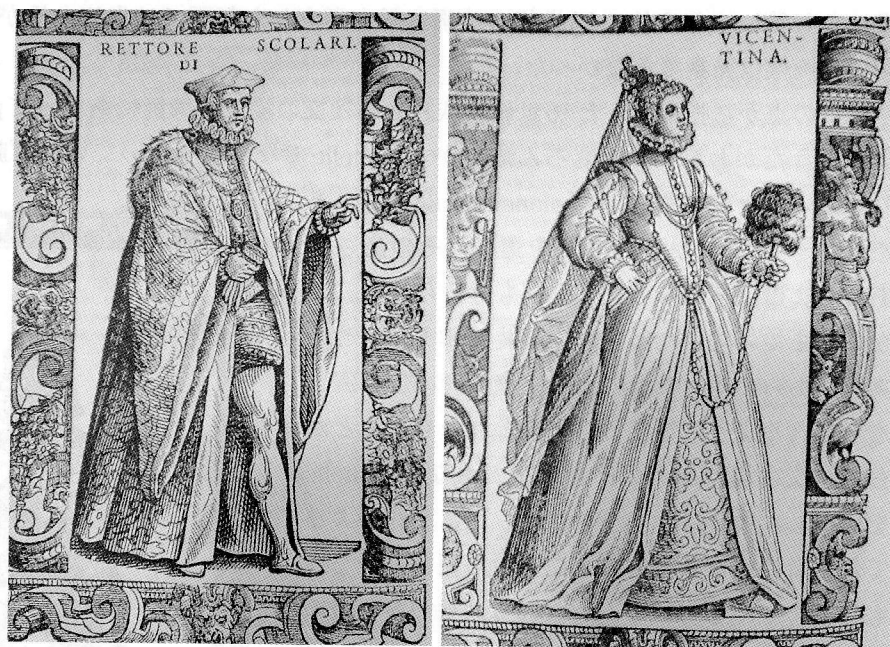


図4 Vecellioによる版画、左パドヴァ大学学長、右ヴィンチェンツァの婦人（Vecellio, C. 2004：106, 142）

4. 宮廷舞踊と pianelle

4-1. Carosoの著作と pianelle

ルネサンス期のイタリア宮廷舞踊については本稿では pianelle とのかかわりにしぼって述べる。この点で注目されるのは1600年にヴェネツィアで出版された舞踊教師であり作曲家のFabritio Caroso（1526-1600）の著書"Nobilità di Dame"（『貴婦人の気品』）である¹¹⁾¹⁵⁾。この本にはダンスのステップや楽譜とともに騎

士、貴婦人の作法が述べられ、その中の貴婦人の作法に pianelle をはいたときの歩き方がある。その際非支持脚を「つま先から足を上げて膝が曲がらないように静かにおろす」と良いとされ、また音をたてることは無作法とされた。この歩き方は現代のクラシックバレエの指導法と共通するのが興味深い。この記述は社交の場でのお辞儀の仕方、ダンスにさそわれた場合のふりまいから辞去するまでの一連の立ち居振る舞いのつながりの中に置かれていることから、当然社交の手段としての舞踊の場でも pianelle がはかれていた場合があると考えられる。

舞踊の際に pianelle がはかれていた場合があると考えるもう一つの理由は、当時の貴族女性の衣服の丈がおおむね pianelle の底の高さにあわせて決められていたことである。先述したように16世紀の、とくにヴェネツィアの貴婦人画像中不自然にスカート部分が長い場合は高さのある pianelle の着用の可能性がある⁷⁾。Caroso の書には "Nobilità di Dame" の他にも1581年の "Il Ballarino" (舞踏家)¹⁶⁾ (Lindall, G. 前掲) があるが、二著作の舞踊場面のさし絵 (前者、後者共通七葉) を調査した範囲内では女性は身長が男性と同じかやや高い。このことは pianelle 着用を示唆する可能性がある。

舞踊の際に pianelle を脱いだ場合はあっただろうか。その場合丈が余るので腹部や腰部でベルト等で裾をたくし上げ端折らなければならない (Embleton, G. 2013 : 30)。15世紀の画像では Philippo Lippi の「サロメ」(1452-65)¹⁴⁾ でそのように裾をたくしあげた女性—サロメ—が底つきタイツ着用と思われる足をあげて踊る場面がえがかれており、また農民等の庶民も動作のために服をたくしあげることがあった。16世紀の貴婦人の衣服は図5にみるように前世紀よりさらに重厚なものでありたくし上げは困難とみられるし、作法書のさし絵にくわえ他の16世紀の絵画資料も調査した範囲では貴族女性が舞踊のさいに衣服をたくしあげている画像は発見できなかった。

以上の点から推察すると16世紀貴族社会の社交の場では舞踊にあたって pianelle をぬぐ習慣があったかどうかはうたがわしい。もちろん最初から pianelle でなく靴をはいていれば動作上問題はない。「正装感」よりも踊ることを優先すれば pianelle をはかず (または動きやすい低い pianelle を選び) その高さにあった丈の服を着るという選択も考えられる。だがこれまでみてきたように「服装の非実用性こそ高位をあらわす」こと、王侯、権力者の着装例にもみられるように権威とのかかわりをもつことから、社交の場にあえて不自由をとまなう pianelle を着用した場合はたんなる流行以上にそれによって着用者の地位を高め、また招いた側にたいしても礼儀をつくしているとみられる効果があったのではないか。Castiglione の『宮廷人』(1528) に女性のスカートに隠れた靴下とビロードの pianelle (原文では *chiapinetti*) が動作の際にふと見えるときには「この上なき気品」(*grandissima gratia*) があるとする記述 (Castiglione, B. 1987 : 140-141)^{注5)} は、*gratia* が Castiglione のいう「宮廷人」の資格の中心概念であるだけに上記の見解を支持するものといえよう (Muzzarelli, C., 2006 : 64-65 はこの記述を官能性と関連づけている)。なお男性のはきものについて、『宮廷人』に



図5 Caroso "Nobilità di Dame" さし絵
女性の身長が男性より高い (Lindall, G., 前掲)。

は、貴族男性がダンスの場で pantofolle をはいている記述があり、これは清水他の訳では舞踏靴と訳されているが、pantofolle は pianelle の異称でもあるのでスリッパ状の pianelle の可能性もある (Castiglione, B. 1987 : 92-93)。

Caroso の二つの著作のさし絵の男性は調査した七葉ではいずれも薄手の素材とみられる平底靴で図5のように甲が深くかかと部分もおおわれている。

4-2. 舞踊場面における pianelle の着用と再現映像による検証

"Nobilit  di Dame" 1600年版の原文を検討すると、先の歩き方の記述の後に、手幅一つ半 (un palmo & mezzo) と指三本 (tre dita) の高さの pianelle をはいた場合と Ballo Fioretti、Mutanze di Gagliarda の舞曲の名称が見える。これは舞踊場面における pianelle の着用を示唆するものである^{注6)}。実際の宮廷舞踊場面で着用されていた可能性を調査するため、筆者がYouTubeでCaroso等の舞曲と舞踏譜による再現舞踊の技法を検討した結果、Carosoの"Il Ballarino"85作品中再現舞踊映像のある15作品、"Nobilit  di Dame"48作品 (うち6作品の題名は前作と共通) 中の映像4作品の中で、"Il Ballarino"中のGracca Amorosa、Contrapasso、両者共通のBallo del Fiore (原文にあるBallo Fiorettiと同一か) の3作品、また同時代のToinot ArbeauのBranle de Cheveux¹⁷⁾については女性は跳躍をとまなうステップもなく、とくに最初の三作品はお辞儀 (riverenza) と各種のステップによる前後左右への移動を中心に構成されており、舞踊の際体重を足前部にかかけ、つま先からの着地によれば指三本分の高さの pianelle をはいた場合でも対応可能とみられた。また原文にあるGagliardaは"Il Ballarino"中のGagliarda di Spagnaをさすと思われる。Gagliarda di Spagna 自体の映像は未見であるが、Gagliardaは一般に女性でも小さな跳躍 (hop) が入りやや難易度が高い。ただ当時の宮廷舞踊は舞踊教師の指導を前提としており、訓練によりできた可能性はある。

舞踏会には貴族階級に属さない舞踊専門の舞踊手も余興のため参加していたが¹⁸⁾、そうした舞踊手たちのはきものについては現時点では実証のための資料未見のためここではふれない。

Carosoの著書が出版された背景には上流貴族階級にあこがれ、社交のための礼儀作法と舞踊の教則を学ぼうとする広範な都市富裕層の存在があり、pianelleの作法の記述も、さきのVecellioの図像ともあいまって富裕層に広くはかれていたこと、また16世紀末にその高さが上昇しつつあったことがうかがわれる。

4-3. 各類型による動作難易度の検証

pianelleの形と底の高さは実際の舞踊場面においてどのように影響していただろうか、この点を検証するため以下の実験を行なった。pianelleを形から水平底型、傾斜型、橋型。甲の形状からa深いスリッパ型とb浅いつっかけ型。底の高さから5cmと10cm (傾斜型の場合つま先部分とかかと部分と高さがそれぞれ1-5cm, 1-10cm) と仮定してそれぞれの類型について前進、後退、横移動、小さな跳躍の難易度を (容易A、可B、困難C) の三段階に分け調査した (表1, 2)。なおいずれの場合も体重は足前部にかけることとした。

この結果、2種類の高さのどちらの場合も甲が深スリッパ状で底が傾斜型のものが動作がもっとも容易であった。

表1 pianelleの各類型別下肢動作の難易度 底高5cm

	水平底型a	水平底型b	傾斜型a	傾斜型b	橋型a	橋型b
前進	A	A	A	A	A	A
後退	A	B	A	B	B	B
横移動	A	A	A	A	A	A
小跳躍	A	C	A	A	A	B

表2 pianelleの各類型別下肢動作の難易度 底高10cm

	水平底型a	水平底型b	傾斜型a	傾斜型b	橋型a	橋型b
前進	A	A	A	A	A	A
後退	B	C	B	C	B	C
横移動	A	B	A	A	A	A
小跳躍	C	C	B	C	C	C

5. まとめ

1. 本稿では従来紹介されることの少なかったイタリア14－17世紀のはきものであるpianelleをとりあげ、宮廷舞踊の際に女性にもちいられた可能性について考察した。
2. Fabritio Carosoの"Nobilit  di Dame"の記述、さし絵および当時の再現舞踊から宮廷舞踊場面での女性のpianelle 着用の可能性が推察された。
3. pianelleが宮廷舞踊にもちいられたとの仮説によりpianelle各類型別の下肢動作難易度を実験し、深いスリッパ型で底が傾斜型のものがもっとも動作が容易であるとの結果を得た。

*本稿をまとめるにあたり稲川實（皮革産業資料館副館長）、木口充恵、森下はるみ、安広美智子各氏のご協力をいただきました。記して謝意を表します。

注

- 注1) ヒストリカルシューズ製作者木口充恵氏からの聞き取りによる。
- 注2) kab-kabの名は足音の擬音による。画像はボストン美術館ウェブサイト（mfa.org）参照。
- 注3) 15世紀の木製橋型サンダルの画像はバータ靴博物館ウェブサイト（batashoemuseum.ca）。
- 注4) 1575年製の革製スリッパの画像はボストン美術館ウェブサイト参照。
- 注5) 訳文では靴下とビロードのソックスとなっているが教会へ行くとき等の文脈であるので屋外で靴下の重ねばきをしていることになり不自然。文献15の彌勒訳では「靴下とビロードのpianelle」。
- 注6) 原文：Per  camminando con quest'ordine, se ben la Dama portasse le pianelle pi  d' un palmo & mezzo alte, parer  che camini con le pianelle di tre dita; & port  fare nel Ballo Fioretti, & Mutanze di Gagliarda, si come hoggi-di lo f  vedere al Mondo.（以上のような歩き方をすれば今日みられる手幅一つ半大（約16.5cm）までの高さのpianelleをはいた貴婦人も指三本分の高さのpianelleをはいたときのようにBallo Fioretti やMutanze di Gagliardoを踊れるであろう）筆者試訳による。

文献

- 1) Carpaccio, V. 1490-1496「使節たちのイングランド宮廷への帰国」, 聖ウルスラ伝説, ヴェネツィア, アカデミア美術館。
- 2) Carpaccio, V. 1490,「二人の婦人」, ヴェネツィア, コッレール美術館。
- 3) Carpaccio, V. 1500-1506,「宮詣で」, フィレンツェ, ウフィツィ美術館。
- 4) Castiglione, B.『宮廷人』清水純一他訳注, 1987東海大学出版会, 94-195。

- 5) Classe, F. ウェブサイト Extant raised heels. 2012, <http://aands.org/raisedheels/Pictorial/extant.php> 2014年9月20日参照, 原著 Orsi-Landini, R., Niccoli, B. *Moda a Firenze 1540-1580: Lo Stile di Eleonora di Toledo e la sua influenza*.
- 6) Embleton, G. 濱崎亨訳 2013 『中世兵士の服装』 34.
- 7) Franklin, C. 監修 2013 『Fashion 世界服飾大図鑑』, 河出書房新社 94.
- 8) 服装文化協会編 1986 『増補版服装大百科事典』 381, 文化出版局.
- 9) 市田京子 1996 「モカシンからハイヒールまで」『靴のラビリンス』 INAX ギャラリー 21-24.
- 10) 川崎淳之助, 安広美智子, 岸田真弓, 佐藤純, 2010 「15世紀イタリアの宮廷舞踊—ドメニコ・ダ・ピアチェンツァ「舞踊論」について—」 比較舞踊研究 16 巻, 1-8 他.
- 11) Lindall G. ウェブサイト, Caroso's *Nobilit  di Dame*, <http://www.pbm.com/~lindahl/caroso/> 2014年9月20日参照. 原本は合衆国議会図書館蔵.
- 12) Lippi, D. Domenico C., 市口桂子訳, 2006 『メデイチ家の墓をあばく』 白水社, 95, 100-101.
- 13) Lippi, Philippo 1452 「ピッティのトンド」 フィレンツェ, パラティーナ美術館.
- 14) Lippi, Philippo 1452-65 「サロメ」 洗礼者ヨハネの生涯, プラート大聖堂壁画, プラート.
- 15) 彌勒忠史 2008 『イタリア貴族養成講座』 集英社, 141-147. 原著 Fabrizio Caroso *Nobilit  di Dame*, Venezia, il Muschio, 1600. Avertiment XI.
- 16) 彌勒忠史 前掲 125-128, 原著 Fabrizio Caroso *Il Ballarino*, Venezia, il Muschio, 1581.
- 17) 彌勒忠史 前掲 153-159, 原著 Thoinot Arbeau, *Orch sographie*, Langres, Jehan de Preyes, 1588.
- 18) 彌勒忠史 前掲 99, 原著 Di Messisbugo, C., *Banchetti, Compositioni di vivande, et appareccio generale* Ferrara, 1549.
- 19) Muzzarelli, C.: Sumptuous shoes-making and wearing in medeaval Itary, Riello, G., & Mcneil, P. (Eds.) *Shoes* 50-75, 411-412.
- 20) Pisetzky, R. L. 池田孝江監修, 森田義之他訳 1987 『モードのイタリア史』 297.
- 21) Riello, G. & Mcneil, P. (Eds.) 2006 *Shoes—from sandals to sneakers*, Berg, London, New York.
- 22) Semmelhack, E., BBC news, 25 January 2013.
- 23) Van Eyck, Y. 1434 「アルノルフィニ夫妻像」 英国ナショナルギャラリー, ロンドン. ウェブサイト [http://en.m.wikipedia.org/wiki/Patten_\(shoe\)#/image/File:Jan_van_Eyck_004.jpg](http://en.m.wikipedia.org/wiki/Patten_(shoe)#/image/File:Jan_van_Eyck_004.jpg).
- 24) Veblen, T. : 小原敬士訳 1961 『有閑階級の理論』 岩波書店.
- 25) Vecellio, C. 加藤なおみ訳 2004 『西洋ルネサンスのファッションと生活』 柏書房 396-397.
- 26) Vianello, A.: Courtly lady or Courtizanne? The venetian chopine in Rennaisance, Riello, G. & Mcneil, P., (Eds.) 2006 *Shoes*: 76-93. 412-413.
- 27) 若桑みどり 2008 『クアトロ・ラガッツィ』 (下) 23-25, 集英社. 天正少年使節の4人はおそらく日本人としてはじめてイタリア宮廷舞踊にふれた人びとであろう.